

郷土あれこれ

郷土館だより

第14号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607

五日市の酪農物語 増戸乳牛組合の場合

はじめに

ある日一人のお年寄が郷土館にみえられ、「牛の人工授精器具一式を資料として寄贈したい」と申出られた。この方は、五日市町山田にお住まいの、小野沢紀勝氏で、旧増戸村の酪農組合の責任者（西多摩酪農業協同組合増戸支部長）であり、戦前戦後を通じ当地区の乳牛飼育の中心にあって活躍された方とわかった。小野沢さんは自分が牛を飼うだけでなく、組合員の面倒をよくみられた方で、牛の出産、病気人工授精まで世話をして廻られたという。組合の記録も一箱お持ちということなので、昔の酪農業の実情を伺うため参上した。

(1) 乳牛組合の出発

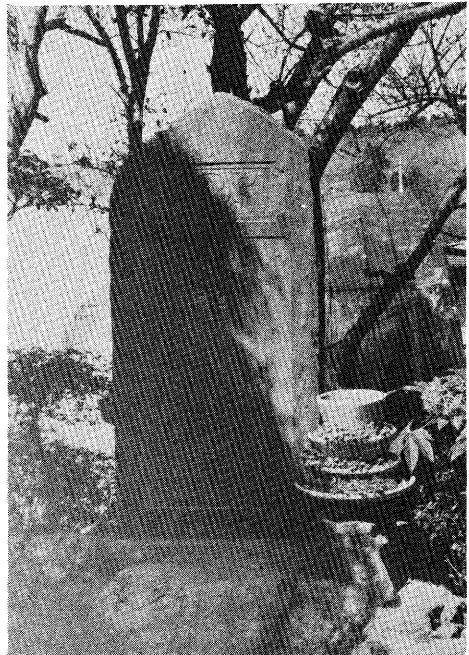
- 小野沢さんはおいくつですか。
- 明治37年、日露戦争年の紀元節の生れですよ。
- それで紀勝さんですか。小野沢さんは当地の酪農業の大先輩ということですが、戦前旧増戸村にあった乳牛組合の話からお聞かせください。



自宅で語る小野沢さん

○ 増戸村で乳牛を飼いはじめたのは、昭和8年、北伊奈の西田秋之助、網代の岸春藏の2人で、この人たちが乳牛界の元祖でしたね。そこへ北伊奈の沢田森太郎さんが目をつけた。沢田さんはお蚕の種屋をやっていたが、もう生糸は先がみえた。これからは養蚕より酪農業の時代だと熱心に説いて廻り、昭和11年に乳牛組合を作った。

- 小野沢さんは？
- 私は昭和10年頃から牛を飼っていたが、沢田さんに共鳴して、一生懸命同志をふやそうと歩いて廻りましたよ。牛は粗食で、毎日乳を出すといってね。組合の出来始めはみんな1頭飼いで、乳は八王子の子安にある多摩乳牛組合までリヤカーで運んだ。
- 毎日ですか。
- 毎朝、雨が降っても雪が降っても。小型の輸送缶4本つけてね。そのうち



増戸乳牛組合の創設者 沢田森太郎氏の
顕彰碑。北伊奈・沢田辰夫氏の庭に建つ。



牛乳輸送缶

組合員もふえ、昭和15年の暮れに瑞穂に西多摩乳牛組合ができ、そつちへ牛乳を出すようになつた。

— 組合員は何人位？

○ 初めは30人位だった。

名簿があるよ。

— 昭和12年増戸村乳牛組合の名簿によると、

組合員34名（伊奈16、網代8、山田8、三内2）

乳牛推計40～50頭（最高で3頭飼い）＝

— 短期間によく普及したものですね。

○ なにしろ、沢田さんが熱心だったからな。

— 文書資料によると昭和12～16年にかけサイロや尿床溜の建設、乳牛購入に東京府より合計4千余円（現在の1千万円以上に当る）の助成金が支給されている。乳牛飼育は酪農振興を目指す国策に沿っており、この助成金が急激な普及をうながしたようだ。

昭和4年に世界恐慌、昭和6年に満州事変が起り、日本の生糸輸出は停滞し、農家の家計をうるおしていた繭価は低迷をつけた。どこの村でも先のみえた養蚕にかわる収入源を探していた。山地の少い増戸村は林業に依存する余地はない。蔬菜栽培には気候寒冷で、消費地からも遠すぎる。そこで蓄産が注目された。近隣には養豚業に熱心な村も出た。「増戸は乳牛でいこう」と提唱したのが沢田森太郎氏であった。「沢田組合長が今生きていれば、町長さんだね」と小野沢さんは称讃して止まない。

乳牛は当時、これから乳を出す成牛1頭が400円前後した。小学校の先生方の月給が60～100円位の頃の話である。

牛は5、6年は搾乳出来るが、この高価な投資に見合うかどうか。保守的な農家の人々を未知の酪農業に誘い込むのは容易なことではなかったろう。沢田氏はそこで組合を結成し、助成金の獲得に努めた。また乳牛が途中病死した際の見舞金制度なども設けた。

沢田森太郎氏は残念なことに、昭和17年になくなられたが、増戸の乳牛組合は同氏の敷いた路線の上を辿って

育っていた。さすがに戦争末期は人手もなく、牛も減ったが、戦後は一転して盛んになった。

(2)牛乳の共同出荷

— 戦後は日本人の食生活も変わり、牛乳の需要はぐんと高まりましたから、乳はよく売れたでしょうが、その代り飼料に困ったのではないですか。

○ フスマやヌカの配給が沢山もらえたね。私が配給飼料を配って廻ったが、昭和30年頃は100軒以上にふえて大変だったね。

— 最盛期の組合員は何人位になったんですか。

○ 玉の内（日の出町）や渕の上（秋川市）も入れて150人にはなったね。

— 乳牛の頭数は？

○ 3、4頭の家も多くなったが、1頭の家もあり、平均2頭ちょっとかな。とにかくその頃、増戸の農家は、300戸位だったから、半数近くが牛を飼っていたことになる。増戸農協の仕事も酪農関係が主だったんだ。

— 乳はどうにして出したんですか。

○ 集乳所を作って、そこへ持ちよると西多摩酪農組合（戦前の西多摩乳牛組合）のトラックが集めに来た。

— もうこちらから運ばなくてよかったんですね。

○ 集乳所は伊奈の他小机にも作った。五日市の深沢、戸倉、留原は伊奈へもってきたね。

— 共同出荷というの、いろいろ問題があったでしょうね。

○ 持ちよった乳と一緒にまぜるからな。牛乳のしづり立ては温かい。これを水の温度（14℃位）に冷さなければ腐りやすいので攪はんして温度を下げる。大勢の中には下げきらない牛乳をもってくる者がいてね。私はやかましかったよ。正直者が迷惑するからな。

— 水を混ぜたりしたら困りますね。

○ いちいち比重計で計るんだ。乳代は脂肪の率で違ってくる。

○ 夫人 細菌検査もありましたね。私は毎朝4時に起きてお湯をわかしました。乳をしづる前に、お乳のまわりを熱いお湯でよくふくんで。

(3)酪農家の暮らしと家計

— 東京周辺の牛乳は飲用牛乳として売れますから、遠隔地の加工用牛乳より乳代がよかったですでしょう。

○ そうよな。メーカーが乳の取りっこだったな。西多摩酪農は二つに分かれ、南はグリコ乳業、北は名糖（協

同乳業) ということになった。

— 小野沢さんは乳牛専業だったんですね。

○ まあそうだね。3頭飼っていて、それだけで子供3人を高等学校まで出したからな。

○夫人 うちの牛はみんなよく乳を出してくれて助かりましたよ。乳は1日3回しぶるんです。最後に終るのが夜の10時。

— 朝4時から、夜の10時まで働くのですか。

○夫人 それが毎日ね。牛を飼っている間はどこにも出られませんでした。

— 糞尿の処理も大変なんでしょうね。

○ うちの畑に使って、余れば近所の農家がもっていってくれた。まだ百姓やってたものが多かったからな。今は大変らしい。

— ご自分の畑ではトウモロコシなどの飼料をつくる。

○ うん、牧草もつくったな。

— 自給飼料があれば、その分だけ餌代を節約できますね。

○ そう。しかし、結構組合からも買ったな。

=たまたま昭和39年の小野沢さんの乳代精算書が見つかった。それは次のようにあった。

月	乳代	飼料等差引手取額
10月	80,700円	63,004円
11月	73,843円	52,997円
12月	67,339円	43,320円

月平均5万3千円の手取収入である。この額は当時の給料取りでいえば中の下、夫婦で1日18時間休みなく働いた者の報酬としては、あまりに少い。=

— 小野沢さんがおやめになったのはいつでしたか。

○夫人 沖縄の海洋博を見にいこうというので牛を売った— あれは確か昭和47年でしたね。

— そうすると、もう14年前ですね。

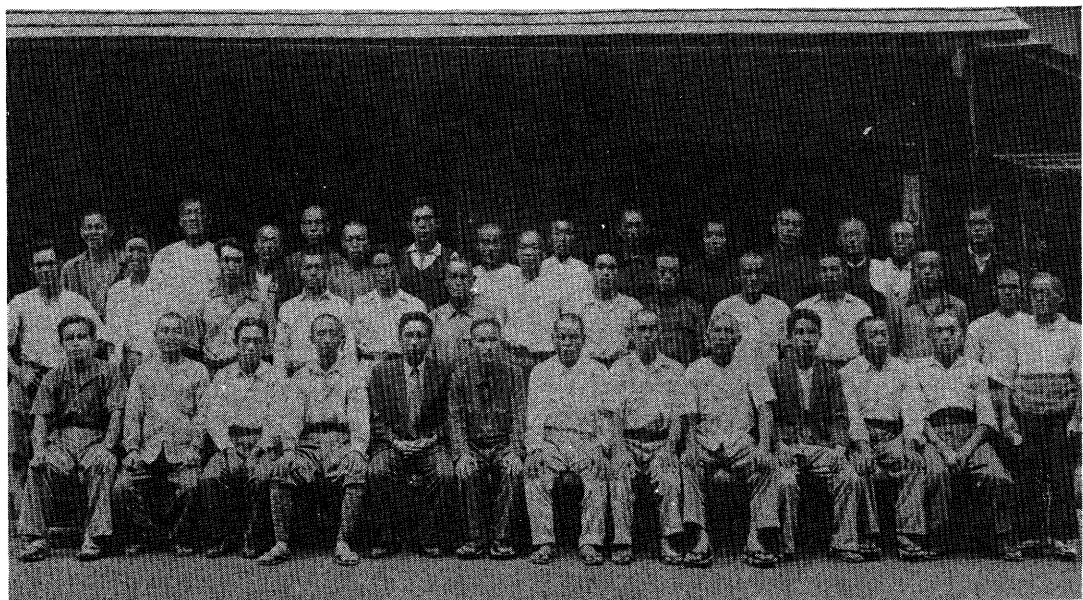
○夫人 海洋博から帰ったら、牛を買いもどしてまたはじめようと言っていたんですが—私たちももう年ですね。子供たちはいやがって次ぎ次ぎに勤めに出ていました。あんまりきれいな仕事じゃありませんからね。

○ つまり、こんな苦労しなくとも、もっと楽に金がとれるということだな。

=日本の経済成長は1960年(昭和35年)以降はじまった。技術革新の結果、第一次産業(農・水・牧)の従事者は、第二次産業(工・鉱・建設)、第三次産業(商・公務等サービス系)へ変っていった。経済は活況を呈し勤労者の給与水準も上昇した。乳牛飼育者の廃業はこうした経済界の大勢に従う、いわば必然の流れでもあった。

当初、1, 2頭飼いの小規模な副業的酪農者から廃業していったが、昭和47年小野沢さんが廃めた時点で、牛乳出荷者の数は10人となり、最早や組合を維持する意味も少なくなった。

小野沢さんは、他の物価上昇にくらべ乳代は上らず、割が悪くなったと話されたが、一つには交通が便利になり、千葉をはじめ関東各地の牛乳が、飲用乳として東京に搬入されるようになったことも乳代低迷の一因であるようだ。酪農業を一つの経営体として成立させる為には、近代設備をととのえ、最低2, 30頭は飼わなければならなくなつた。丁度養鶏業が大きな鶏舎を設けて、何千羽と飼わなければやっていけないと同様である。



昭和十六年 増戸乳牛組合員たち

前列背広姿 沢田組合長、右隣、坂本春亮村長、
その右、小野沢紀勝氏

(4)現在の酪農業

— 藤原さんを尋ねて —

小机にお住まいの藤原隆一氏は、小野沢さんの同志である。昭和30年代の組合資料をみても乳量で常にトップを占めていたのは藤原さんだった。現在、五日市地区の酪農業者は4軒に減ったが、藤原さんはそのうちの1軒、熱心な経営ぶりで知られている。ご当主隆一氏は、明治34年生れ、今年85才になるが、お顔の艶もよく、お元気であった。

— 小野沢さんから伺って参りました。

F うちで始めたのは昭和23年、初めは3頭だった。

今は20頭、他に育成中が8頭ばかりいる。

— ご家族だけでやっているんですか。

F 僕が中心で嫁が助け、家内も少し手伝っている。わたしはもう腰が悪くなって駄目だね。

— 今どの位の乳を出されるのですか。

F 年間11万から11万5千キロ（グラム）だね。

— 乳代は？

F キロ100円位かな、飼料代が55%かかる。今の経営は乳量を上げることが大事で、牛も回転が早くなっている。

— 自給飼料は

F 借地を含め7反程つくっているが、あまり手のかかるものはやらない。

— ご家族だけで、これだけ手広くなさっているというのは、機械力を利用し、合理的な経営をされているということでしょうね。

F 昔と違って、朝も普通に起き8時半頃から作業に入る。乳は午前と夜の2回搾りで、夜は9時半頃始め、11時半に終る。

— 遅くまで大変ですね。

F 今は乳を搾るのも、冷やすのも機械でできるし、乳は家まで取りにきてくれるが、なんといっても生きものを飼うのは大変だね。

— 将来はどうお考えですか。

F 生牛乳の需要はどうも頭うちららしいね。メーカーが売れさえすればよいというので、いろいろな飲料を作ったから、牛乳を飲む量がへった。

しかし、問題は糞尿の始末だな。手間はくうし、公害ということになるしな。

— 藤原さんはお年をとられていても頭脳明晰で、数量の説明にもよどみがない。一生を一つ仕事に打ち込んだ



藤原さんの牛舎

人の持つ毅然としたものを感じさせた。

帰りに牛舎を見学する。糞の片付をしていたご子息さんは「もっと設備をよくすれば、キレイになるし、楽になるが、それだけ金をかけてよいものやら」と苦笑しておられたのが印象的であった。

おわりに

酪農業という言葉から、広々とした野原で悠々と草をはむ牛の群を連想するが、そんな牧歌的風景は日本では北海道を除くとほとんど見られない。狭い日本の中の、さらに狭い西多摩の山際地域に発生した酪農業は、稲作農業と同様、人手を尽し、精と根を尽した性格のものであった。それは小野沢ご夫妻のように勤勉誠実な人々によって支えられてきたが、「こんな苦労をしなくとも、もっと楽に金がとれる時代」一小野沢さんの言葉一の到来によって幕を閉じた。

小野沢さんからバトンを引継いだ藤原さんの改良型酪農経営は、経理的には立派な成績をあげておられる。しかし当事者のご子息さんの表情から、東京近郊酪農業の途が必ずしも平坦なものでないことが感じられた。

ともかく小野沢さんが郷土館にみえられたのは、ご自分ならびにお仲間の苦闘の歴史を、残しておきたいとの一念のようであった。確かに増戸乳牛組合関係者の業績は近代郷土産業史上特記されるべきものと思われる。そしてまた、「こんな苦労」から縁遠くなった人々に知っていたい話もある。

小野沢さんをお尋ねし、広々としたお庭の新築のお宅で、お孫さんに囲まれてお暮しの様子を拝見し、心なごむ思いであった。ご夫婦揃った楽しい老後の日の末永く続くことを念じて辞去した。